

<長期的に増加傾向にある紫外線、強さのピークは8月>

なりたい肌No.1「透明感のある肌」に黄信号 例年に比べ、紫外線対策を忘れがちな女性は47.3% 外出機会が減り、対策自体もおっくうに

第一三共ヘルスケア株式会社（本社：東京都中央区）は、20代～50代女性を対象に、今年の紫外線対策に関する調査を行いました。

その結果、外出自粛下において紫外線対策がおろそかになっている女性が多く、今般の状況が女性の紫外線対策に影響を与えている可能性が示唆されました。また、“透明感のある肌”に憧れ、透明感が失われることを気にする一方で、マスクが紫外線対策になるなどの誤解も生じていることが明らかになりました。

① 外出自粛で、女性の紫外線対策がおろそかに (P.1)

- 紫外線対策を忘れがちな女性は約半数（47.3%）、外出機会が減り対策自体もおっくうに
- 約4割（38.9%）の女性が、ファンデーションも日焼け止めも塗らずに外出マスク（布マスク、不織布マスク）をしても日焼けをしたと感じた女性も、約4人に1人（24.8%）
- 今年の肌の“しみ”、“蒸れ”、“透明感が失われること”を約7割が気にしている

② “透明感”のある肌に憧れながら、紫外線対策に誤解も (P.3)

- なりたい肌 No.1は、“透明感のある肌”
- 紫外線への不十分な対策や誤解も生じている
 - ✓ 「日焼け止めを塗るのは外出前の一回」：70.9%
 - ✓ 「パッケージの記載よりも日焼け止めを薄めに顔に塗る」：47.6%
 - ✓ 「マスク（布マスク、不織布マスク）は顔の紫外線対策になると思う」：49.3%
- 紫外線対策を行っている女性は9月から減少するが、油断は禁物

調査概要 ■実施時期：2020年6月29日（月）～7月6日（月） ■調査手法：インターネット調査
 ■調査対象：20代～50代女性 ■有効回答数：800名 ■調査地域：全国
 ※構成比（%）は小数点第2位以下を四捨五入しているため、誤差が生じます。



巣ごもりシーズンのうっかり日焼けが、夏のしみとなって現れるかもしれません (P.4)

銀座スキンクリニック院長 坪内 利江子先生

- コロナ禍で続く生活が、“しみ”を誘発している可能性。マスクには紫外線を防ぐ機能はほとんどない
- 日焼け止めは、たっぷり、こまめに。刺激はさけて
- スキンケアやサブリなど内外のアクティブケアも

③ 人が感じる「透明感のある肌」の客観的評価方法を開発 (P.5)

NEWS

①外出自粛で、女性の紫外線対策がおろそかに

外出自粛が続いた影響からか、紫外線対策をおっくうと感じている女性が約7割存在し、日焼け止めもファンデーションも塗らずに外出する人も約4割（P.2参照）であることが明らかになりました。

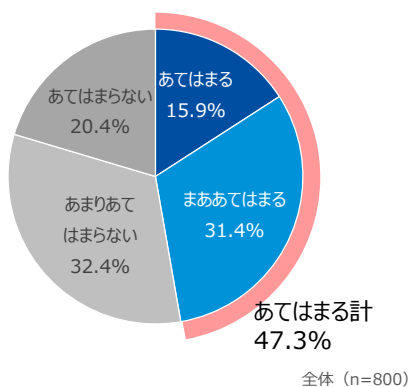
今年の夏は、例年より不安定で湿度も高いと予想される中、感染症対策としてマスクを着用する日々が続きます。調査から、約7割の女性が今年の肌の「しみ」「蒸れ」「透明感が失われること」を気にしていることも明らかになりました。

■ 紫外線対策を忘れがちな女性は約半数（47.3%）、外出機会が減り対策自体もおっくうに

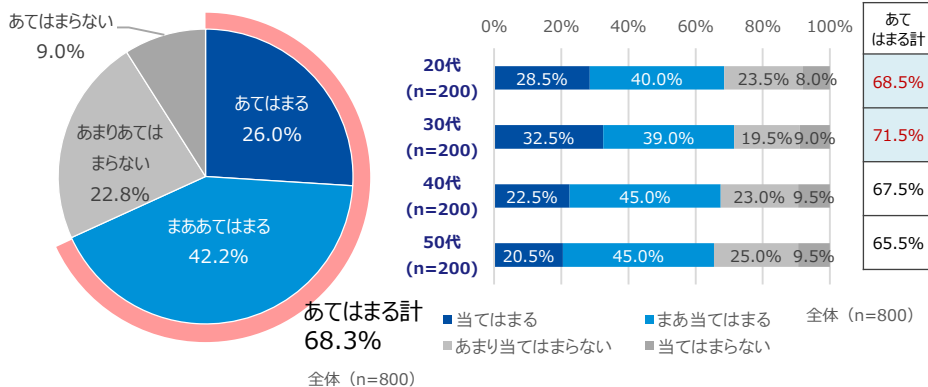
調査の結果、「今年は例年より紫外線対策を忘れがち」と回答した女性は、約半数（47.3%）にも及びました。

さらに、「外出が少ないので紫外線対策をするのがおっくう」と回答した女性は、約7割（68.3%）に上ります。年代別で見ると、20代と30代がやや高めです。今年の巣ごもり生活、外出自粛の影響がうかがえる傾向となりました。

今年は例年より紫外線対策を忘れがち



外出が少ないので紫外線対策をするのがおっくう



※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、誤差が生じます。

※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、誤差が生じます。

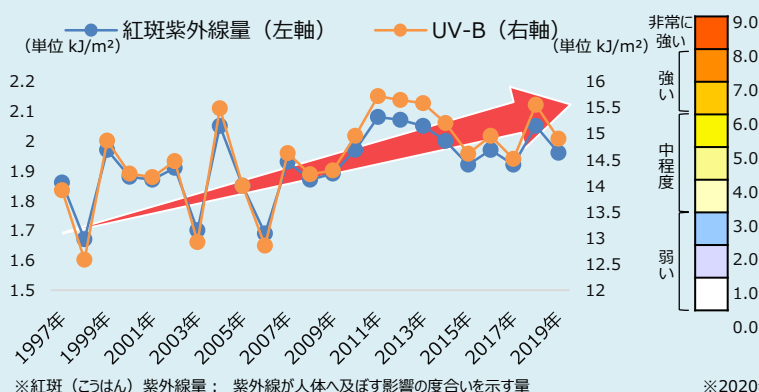
夏の紫外線量

長期的に増加傾向にある紫外線、強さは8月がピーク

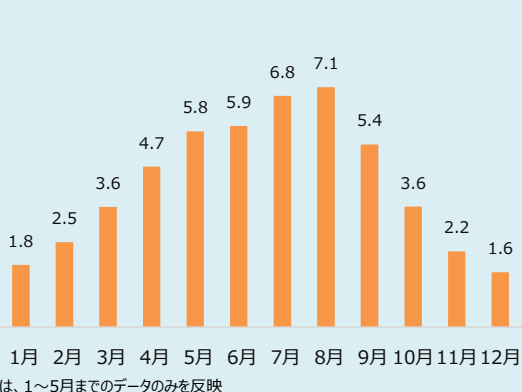
気象庁の観測データによると、国内の紫外線量は、長期的な増加傾向にあります。その原因には、有害な紫外線を遮るオゾン層の破壊などがあるとされています。

紫外線量は、太陽高度が高いほど多くなります。気象庁は、紫外線の人体への影響を指標化した「UVインデックス」を公表していますが、そのデータを見ると8月がピークとなっています。

日本の紫外線照射量（红斑紫外線量とUV-B）の年平均の推移（つば）



UVインデックスの月平均値（2005-2020年の平均値の比較・つば）



出典：いずれも気象庁ホームページより「日積算红斑紫外線量の月平均値（1997年～）」https://www.data.jma.go.jp/gmd/env/uvhp/cie_monthhave_tsu.html
「日積算UV-B量の月平均値（1997年～）」https://www.data.jma.go.jp/gmd/env/uvhp/uvb_monthhave_tsu.html
「日最大UVインデックス（観測値）の月平均値」https://www.data.jma.go.jp/gmd/env/uvhp/uvimax_monthhave_tsu.html

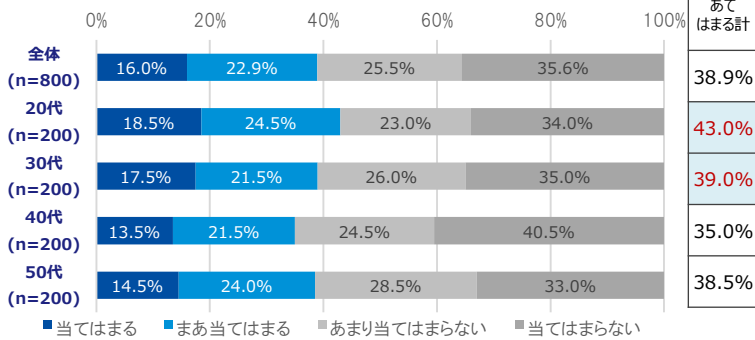
■ 約4割（38.9%）の女性が、ファンデーションも日焼け止めも塗らずに外出マスク（布マスク、不織布マスク）をしても日焼けを感じた女性も、約4人に1人（24.8%）

紫外線対策として顔に日焼け止めとファンデーションを重ね塗りする女性がいる一方、「今年は顔にファンデーションも日焼け止めも塗らずに外出することが多い」と回答した女性は、約4割（38.9%）いることが明らかになりました。年代別では、20代～30代に多い傾向にあります。

また、今年は感染症対策としてマスクの着用が日常的になる中、約4人に1人（24.8%）が「マスクをしているのに顔が日焼けした」と回答しています。この結果も、20代～30代で多い結果となりました。

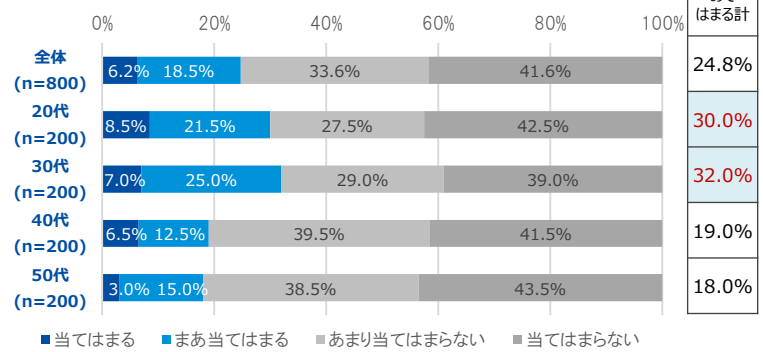
今年は顔にファンデーションも日焼け止めも塗らずに外出することが多い

全体 (n=800)



マスクをしているのに顔が日焼けをしたと感じたことがある

全体 (n=800)



※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、誤差が生じます。

■ 今年の肌の“しみ”、“蒸れ”、“透明感が失われること”を約7割が気にしている

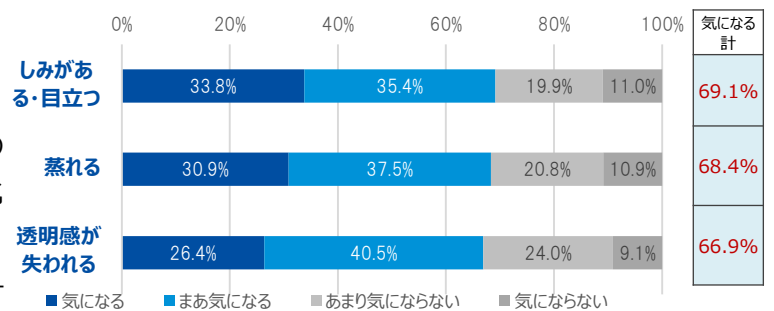
今年の肌に関して気になることを聞きました。

その結果、「しみがある・目立つ」（69.1%）や「透明感が失われる」（66.9%）といった、紫外線の影響を受けて起こる肌の変化を約7割の女性が気にしていることが明らかになりました。

また、マスクを着用する生活が夏も続く中、「蒸れる」ことを気にする女性も68.4%に及んでいます。

今年の肌で気になること

全体 (n=800)



※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、誤差が生じます。

しみができるメカニズム

紫外線から皮膚を守るメラニン色素

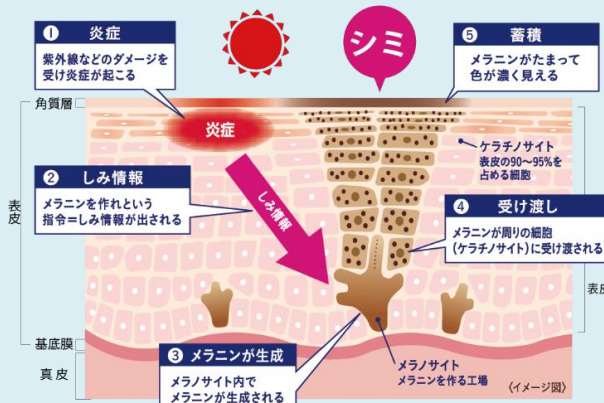
ターンオーバーのサイクルが乱れるとメラニン色素が沈着してしみに

しみに深く関わるのは、皮膚の一番外側にある表皮です。表皮は、その90～95%を占める細胞「ケラチノサイト（表皮細胞）」と表皮の一番下の基底層にある「メラノサイト（色素細胞）」などから成っています。紫外線などのダメージを受けると、皮膚に炎症が起き、メラノサイトに信号が送られ、メラニンという色素が生成されます。それがケラチノサイトに受け渡され、紫外線から細胞核を守ります。

皮膚の細胞は、通常約28日周期で新しい細胞に生まれ変わる「ターンオーバー（新陳代謝）」を繰り返しているため、紫外線を浴びて作られたメラニンも、ほぼ28日サイクルで役割を終え、古い細胞とともに剥がれ落ちます。

しかし、長時間または強い紫外線を浴びると、メラノサイトの数が増え、メラニンの生成は活発化します。一方、加齢や紫外線の浴び過ぎ、肌への過度の刺激、ストレスなどによりターンオーバーのサイクルが乱れると、メラニンも滞留してしまいます。たくさん生成されても、なかなか消えていかないメラニン。これが、しみの正体です。

しみができるメカニズム



② “透明感”のある肌に憧れながら、紫外線対策に誤解も

透明感のある肌を目指している女性が多い一方、紫外線対策を正しく理解していない、あるいは正しく行っていないことも明らかになりました。マスク（布マスク、不織布マスク）が紫外線対策になると考えている人は約半数、日焼け止めを外出前の一回しか塗らない人は7割を超えています。

■ なりたい肌 No.1は、“透明感のある肌”

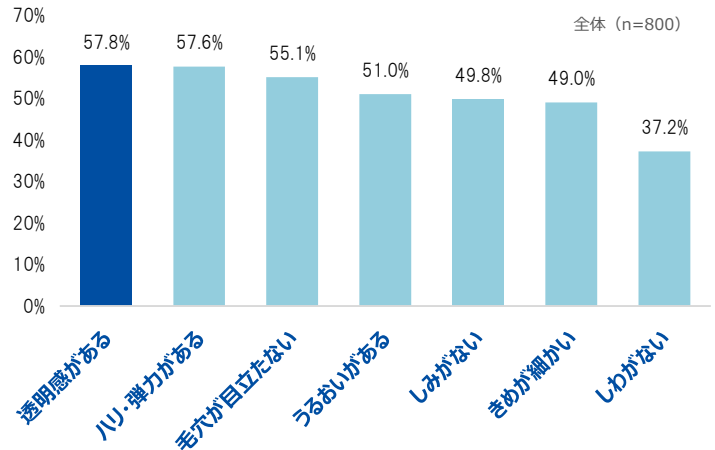
目指す肌について聞いたところ、「透明感のある肌」が57.8%で最も多い結果となりました。

年代別で見ても、20代～40代の幅広い年代において、「透明感のある肌」を目指す女性が多いことがわかります。

「透明感がある肌」を目指している人の割合（年代別）

全体 (n=800)	20代 (n=200)	30代 (n=200)	40代 (n=200)	50代 (n=200)
57.8%	61.5%	61.5%	61.0%	47.0%

どのような肌を目指しているか（複数回答）



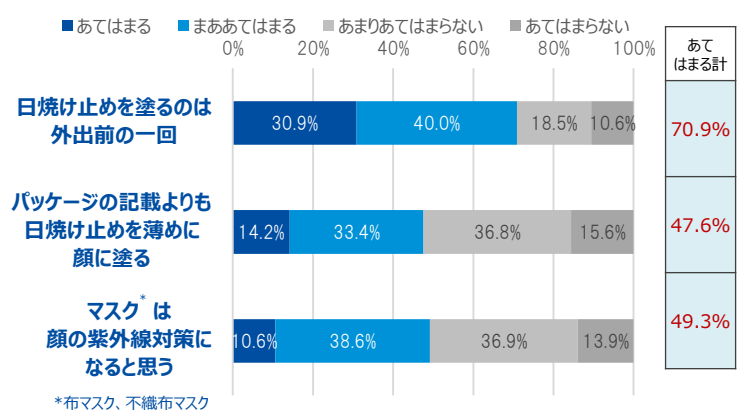
■ 紫外線への不十分な対策や誤解も生じている

透明感のある肌、しみがなく肌への第一歩は、紫外線対策です。しかし、十分な理解がなされていないことが調査で明らかになりました。

「日焼け止めを塗るのは外出前の一回」と回答した人は70.9%にのぼり、「パッケージの記載よりも日焼け止めを薄めに顔に塗る」ことを習慣としている人も、47.6%いることがわかりました。

また、「マスク（布マスク、不織布マスク）は顔の紫外線対策になると思う」と回答した人も49.3%であったことから、マスクの着用が、紫外線対策の手を抜く原因にもなっている可能性が示唆されました。

紫外線対策に関する考え



*布マスク、不織布マスク
※構成比(%)は小数点第2位以下を四捨五入しているため、誤差が生じます。

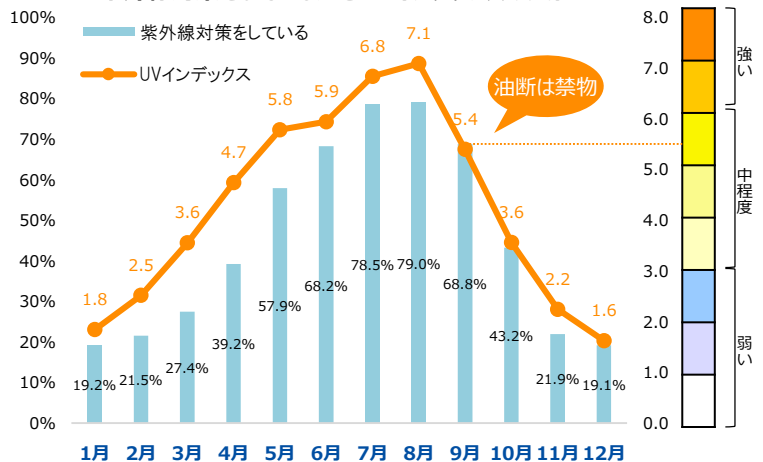
■ 紫外線対策を行っている女性は9月から減少するが、油断は禁物

例年の紫外線対策を行っている時期について聞いたところ、ピークは7月～8月で、この時期は約8割の女性が紫外線対策を行っています。

しかし、9月に入ると1割減の約7割（68.8%）に。気象庁のデータでも、8月から9月ではUVインデックスの数値は低下します。しかし、決して「弱い」わけではないことから、9月になっても油断は禁物です。

また、紫外線A波（UV-A）によるしみは、すぐに表面化せず、後になって現れることから、秋にかけての「しみケア」も大切だといえるでしょう。

紫外線対策をしている月とUVインデックスの変化



※UVインデックス：2020年は、1～5月までのデータのみを反映

出典：気象庁ホームページより「日最大UVインデックス（観測値）の月平均値」（2005-2020年の平均値の比較・つくば）

https://www.data.jma.go.jp/gmd/env/uvhp/uvimax_monthhave_tsu.html

DOCTOR INTERVIEW

調査により、今般の状況が女性の紫外線対策に及ぼした影響が示唆されました。銀座スキンクリニックの坪内先生もコロナ禍での生活がしみを誘発している可能性を指摘しています。坪内先生に、この夏に取り組むべき紫外線対策のポイントについて伺いました。



銀座スキンクリニック
院長 坪内 利江子先生

日本医科大学卒業。同大学麻酔科研修後に皮膚科に勤務。フランス・パリのサンルイ病院皮膚科で臨床研修、パリ大学外国人医師称号を得る。日本医科大学医局長・講師を経て、ハーバード大学皮膚科で3年間レーザーの基礎・臨床研究を行う。帰国後、日本医科大学美容皮膚科外来責任者としてレーザー治療の指導に当たる。2005年銀座スキンクリニック開設。開業後も学会での講演や論文発表、各種治験や臨床研究の受託など多数。医学博士。

巣ごもりシーズンのうっかり日焼けが、夏のしみとなって現れるかも

紫外線対策の基本をしっかりと押さえつつ、アクティブケアも取り入れて

コロナ禍で続く生活が、しみを誘発している可能性

外界の影響を受けやすい皮膚に、最も大きな影響を与えているのが紫外線（UV）です。紫外線は、しみの原因になるだけでなく、シワやたるみなど、さまざまな肌の老化につながります。肌の老化の80%は、紫外線による光老化が原因だといわれ、加齢による自然老化よりも大きな影響を与えると考えられていることから、実年齢と紫外線のエイジングは、分けて考える必要があります。

第一三共ヘルスケアの調査において、外出する機会が減ったことにより、紫外線対策を面倒に感じている女性が多いという結果が出ていますが、「マスクをしているから大丈夫」と、紫外線対策をしないで外出した方も多いのではないのでしょうか。UVカット機能のあるマスクは別ですが、一般的なマスクには紫外線を防ぐ機能はほとんどないので、知らず知らずのうちに肌が紫外線にさらされているかもしれません。

特に紫外線の一つ紫外線A波（UV-A）は、真皮に届き、活性酸素を発生させ、その影響が積み重なり、ポディープローのようにしみ、シワやたるみとなり表面化し始めます。今見えないしみが、これから先に現れるかもしれません。

また、ストレスもしみを悪化させる要因の一つです。ストレスは、しみの原因となるホルモン※1の分泌や活性酸素を発生させ、特に、ほほの両側に広がるしみ「肝斑（かんぱん）」を悪化させるといわれています。外出自粛やテレワーク、学校の休校など慣れない生活が続く、ストレスを感じた方も多いと思いますが、その影響がしみとなって現れる可能性も否定できません。そのほかにも、マスクの摩擦による皮膚の炎症など、今般の状況が、肌に与えた影響は少なくないと私は考えています。

日焼け止めは、たっぷり、こまめに。刺激は避けて

紫外線対策の基本は、日焼け止めです。日焼け止めを塗っているという方も、皮膚科医の私から見れば、しっかり塗れていない、塗っているつもりになっているケースがとても多いです。いくら「SPF50」「PA++++（フォープラス）」の日焼け止めを使っても、指定の量を使わずに薄く塗ってはそのパフォーマンスは発揮されません。

化粧下地やファンデーションを厚塗りするより、日焼け止め。お化粧品をしてマスクをすると、ニキビなど肌トラブルにつながる可能性もありますから、マスクまわりの化粧は控えめにして、日焼け止めをしっかり塗りましょう。夏場は汗も多くかきますので、こまめに塗り直しましょう。パウダーやスプレーで補ったり、ウォータープルーフの製品を活用するのもよいと思います。

そして、皮膚への刺激は極力少なくしてください。特に、クレンジングで肌を強くこすったり、美顔器やフェイシャルマッサージも、やり過ぎは禁物です。クレンジングは、量をたっぷり使い、肌をこすらずに汚れを浮かす。美顔器やフェイシャルマッサージは、皮膚が薄い目の周り、皮膚から骨が近いこめかみや頬骨、おでこなどは強い刺激を与えないようにしましょう。

スキンケアやサプリなど内外のアクティブケアも

しみになりにくい肌を目指したい。そう思う方には、毎日のスキンケアでしみに対応した有効成分を含んでいるものを選び、サプリメントなどの摂取をお勧めします。しみ治療というレーザーを思い出す方も多いと思いますが、実はしみの一種である肝斑の治療では、まずは“トラネキサム酸”の内服薬を使用し弾みをつけ、さらに外用薬やビタミンCなどを摂取する薬物的療法が肝心です。

※1:メラニン細胞刺激ホルモン

③人が感じる「透明感のある肌」の客観的評価方法を開発

NEWS

第一三共ヘルスケア最新研究成果

人が感じる「透明感のある肌」の客観的評価方法を開発

第一三共ヘルスケアは、人が感じる肌の透明感について客観的に評価する方法を開発し、日本色彩学会第51回全国大会（2020年6月27日～7月5日）にて発表を行いました。

本研究により、人が感じる「透明感のある肌」は、輝度^{※2}が高く、色ムラが少ない肌であることを明らかにし、その結果をもとに、客観的に評価する方法を開発しています。第一三共ヘルスケアでは、この研究成果を活かし、今後はこれらの因子に着目することにより、人が感じる透明感が向上することを目指したスキンケア製品の開発につなげる考えです。

※2: 人の目に入る光の量

■ 主観的な評価が主流だった「透明感のある肌」を客観的に評価できる方法を構築

近年、女性のスキンケアへの意識は多様化しており、透明感のある肌は理想の肌質の一つといわれています。透明感のある肌は、「皮膚がくもりなく透き通ったように見える状態」（日本化粧品工業連合会）と定義されていますが、共通した測定方法や評価基準は明確にされておらず、官能評価などの主観的な評価が主となっています。

そこで、「一般女性が感じる透明感のある肌」という点に重きを置き、肌の画像解析を用いて、透明感の官能評価との関係性を解析することで、客観的な評価方法の構築を試みました。

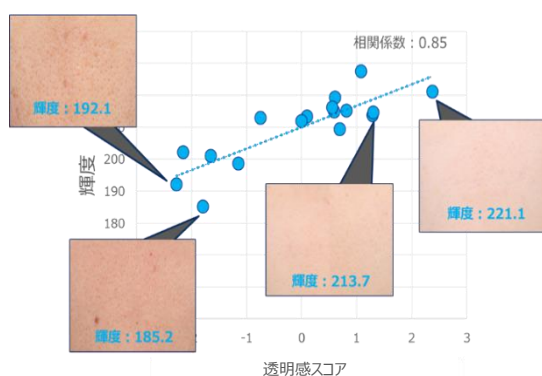
■ 「透明感のある肌」は、“輝度が高く、色ムラが少ない肌”であることが明らかに

「透明感のある肌」の評価方法を検討するにあたり、肌の画像解析結果と、透明感の官能評価（目視評価）との関係性を解析しました。

その結果、肌画像から得られた輝度の平均値と官能評価に極めて高い相関性が確認されました。さらに、肌画像から得られた色情報を透明感スコアに対して重回帰分析した結果、輝度の高さに加え、黄みのばらつきが小さい肌が、人が感じる肌の透明感に大きな影響を与えていることが確認されました。

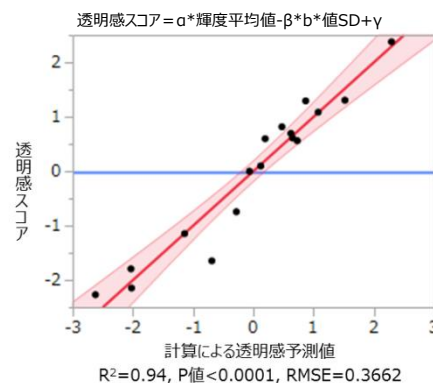
これらの結果から、第一三共ヘルスケアは、「一般女性が感じる透明感のある肌」を“輝度が高く、色ムラが少ない肌”と定義し、今まで主観的にしか評価できなかった「透明感」を客観的な数値に当てはめて評価することを可能にしました。

肌透明感における輝度の影響



透明感スコアが高いと評価される肌は輝度が高く、低いと評価される肌は輝度が低い傾向があることが認められた。

透明感スコアと肌の色情報との相関性



透明感の高い肌は、輝度平均値が高く、かつb*値の偏り（黄みのばらつき）が小さい肌であることが明らかとなった。

【試験方法】

- 目視評価では、20代～50代の一般評価者の女性80名に肌画像を提示し、「透明感」について7段階（+3:かなり感じる～-3:かなり感じない）で評価してもらった。
 - 皮膚色・色ムラの測定では、肌画像を用い、画像処理用ソフトウェアで輝度とそのSD（標準偏差）を取得。次にL*a*b*値^{※3}に変換し、画像中のLab平均値ならびにSDを取得した。
- ※3: L*a*b*色空間での明るさ(L*値)・色味(a*値・b*値)の指標。a*・b*は、色の方向を示し、a*は赤方向、-a*は緑方向、またb*は黄方向、-b*は青方向を示す。

DOCTOR INTERVIEW



銀座スキンクリニック
院長 坪内 利江子先生

透明感のある肌になりたい思いが、 皮膚の理解につながることを期待しています

第一三共ヘルスケアが透明感のある肌の評価指標を新たに発表していますが、私の経験でも、肌の色が均一で、色ムラがない状態は、透明感を示す大きな指標だと思っています。

また、毛穴、ニキビ跡などで肌に凹凸がない状態、皮膚表面のターンオーバーがスムーズで角層の肥厚がない状態は、美しく光を乱反射するので、そうした皮膚の状態が、透明感にもつながっているのではないのでしょうか。

透明感のある肌というのは、明らかに美しい肌を示す要因の一つですが、さらにいうなら肌は、皮膚だけで独立したものではありません。全身の臓器の一つで、身体全体と連動しています。日本の女性たちが、見た目だけでなく、皮膚が持つ機能を知っていくことで、しみなどのスキントラブルについても理解がより深まるのではないかと私は期待しています。

R&D Review

第一三共ヘルスケア
研究開発部 開発第二グループ
土岐 珠未



製薬会社がスキンケアに取り組むことのこだわりを聞く

製薬会社としてこだわる価値の一つが、科学的に根拠のある品質を大切にする事です。当社は研究開発からマーケティング、営業まで科学的根拠にこだわる文化があるので、臨床試験をはじめとするエビデンスデータをそろえることに真摯に対応しています。

このたび、こうした取り組みの成果として、人が感じる「透明感のある肌」を定量的に測る評価方法の確立に成功しました。

<ご参考>

第一三共ヘルスケアについて

第一三共ヘルスケアは、第一三共グループ※4の企業理念にある「多様な医療ニーズに応える医薬品を提供する」という考えのもと、生活者自ら選択し、購入できるOTC医薬品の事業を展開しています。

現在、OTC医薬品にとどまらず、スキンケアやオーラルケアへと事業領域を拡張し、経営ビジョン「健やかなライフスタイルをつくるパートナーへ Fit for You」の実現に向けて取り組んでいます。こうした事業を通して、自分自身で健康を守り対処する「セルフケア」を推進し、誰もがより健康で美しくあり続けることのできる社会の実現に貢献します。

※4: 第一三共グループは、イオーバータイプ医薬品（新薬）・ジェネリック医薬品・ワクチン・OTC医薬品の事業を展開しています。

しみケア総合ブランド トランシーノ 皮膚科学にもとづいた処方と評価法へのこだわり

トランシーノは、皮膚科等医療機関で行われるしみへの対応策に着目して誕生した、しみケア総合ブランドです。

2007年に肝斑というしみを改善する唯一の医薬品として、「トランシーノ（現トランシーノⅡ）」を発売。その後、体の内側からのケアとして、しみ・そばかす対策に「トランシーノ ホワイトCクリア」、外側からのケアとして、「トランシーノ薬用スキンケアシリーズ」を世に送り出してきました。

製薬会社として、皮膚科学をベースとした新たなしみケアのアプローチを探求、また、科学的根拠を追求し、新たな評価法の開発にも挑み続けています。

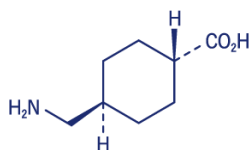


処方

コンセプト成分は“トラネキサム酸”

トランシーノの有効成分として配合されている“トラネキサム酸*”は、第一三共が医療用医薬品として開発した成分で、50年以上にわたって豊富な使用実績を有し、今でも研究が続けられています。

*トランシーノ薬用クリアクレンジングn、トランシーノ薬用クリアウォッシュ、トランシーノ薬用UVパウダーn、トランシーノ ホワイトCクリアを除く



美白

抗炎症
(肌荒れ防止)



“トラネキサム酸”は、皮膚科ではじんましんの治療などに処方されてきましたが、服用した患者のしみ（肝斑）が目立たなくなったという報告や保険適用外での処方が広がってきたことから、OTC医薬品の開発に至りました。

それが肝斑というしみを改善する唯一の医薬品「トランシーノ（現トランシーノⅡ）」です。

発売から10年以上経ちますが、医療用医薬品にはない効能を取得したOTC医薬品（新効能医薬品）として製品化した国内の事例は、現在*でも「トランシーノ」を含めて2例しかありません。 *2020年6月現在

トランシーノブランドの歩み

